

私たちの地球を 少し冷やそう

第41回

増え続けて森荒らすシカ 食べて生態系を取り戻せ

財団法人 地球・人間環境フォーラム専務理事 平野 喬

人間と野生動物が折り合いをつけて、この狭い日本列島で生きていくためにはどうすればいいのでしょうか。春になるとサル、イノシシ、シカ、クマといった野生動物が人里に出没し、人間に危害を加えたというニュースがひんぱんに伝えられます。

日本は先進国でも有数の森の豊かな国。クマのような大型獣が生き続け、人間と共に存していることは驚嘆に値するのだと聞いたことがあります。八百万（やおよろず）の神の宗教観がある日本では、野生動物の多くが神として祭られ、オオカミ（大神）を守護神にした神社があり、アイヌの人々はクマを神とする信仰を持っています。

その一方で、人間は動物を食べないと生存できない生きものです。野生動物を神として信仰しながら、その動物の命を奪って食べる。なんとも矛盾する関係ですが、狩猟の民として知られる「またぎ」とは、「また心を鬼にして、野生動物の命を奪って、自らは生きていく」という、人間の避けがたい営みから出てきた言葉だそうです。

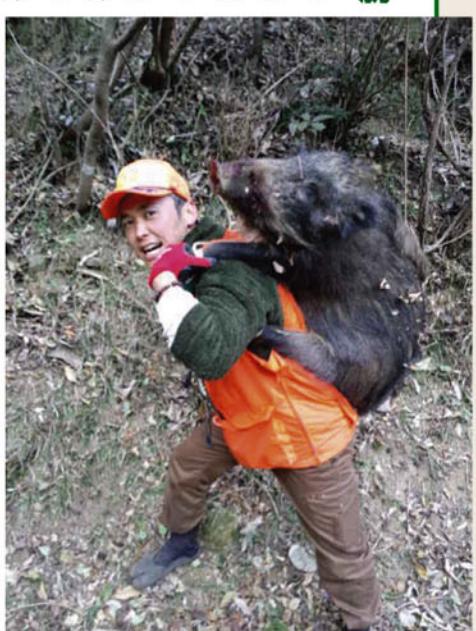
さて、明治以降、やみくもに近代化政策を進めてきたこの国には、豊かさと引き換えに失ったものがたくさんあります。動物で言えば二ホンオオカミ。「またぎ」と呼ばれる猟師さんも数えるほどしかいなくなり、一般の猟師さんも高齢化で激減しています。

鉄分、ミネラル豊富で低脂肪

その結果、日本列島のあちこちで起きてているのが、増えすぎた野生動物による人間界への様々な被害の拡大です。シカによる森林や農地、牧草地の食害は、北海道から九州まで広がっています。北海道は酪農が盛んで乳牛が51万頭も飼われているのですが、その北海道にはエゾシカが65万頭もいます。農作物や牧草の被害額は67億円（2010年）で、害獸に指定されたエゾシカは毎年10万頭も処分されているのですが、エゾシカの増加には追い付けないそうです。

エゾシカが増える要因はいくつも指摘されていますが、天敵のオオカミの絶滅、シカの肉や皮があまり利用されず、シカを仕留めても生活の糧にはならないことから猟師が減っていること、野生動物に対する畏敬や愛護の気持ちが日本人の潜在意識の中にあること、などもあげられています。

最近、狩猟免許を取つて、若くしてプロの猟師になつた井戸直樹さんの話を聞く機会がありました。静岡県富士宮市で自然学校を運営するNPO法人の活動に関わり、自らも「森のたね」(morinotane@gmail.com) という団体の代表を務め、森や里山の保全活動を行なっています。井戸さんは一般の人たちへの狩猟体験、捕獲したイノシシやシカの解体教室、野



仕留めたイノシシを背負って運ぶ井戸さん。▶
命をいただいた野生動物は無駄なく活用する（写真提供：森のたね）

生の動物の肉をおいしく食べるジビエ料理の教室、革を使つたクラフトや財布などもつくり、野生動物の命をとことん活用して生きることの大切さを子どもたちや一般の人たちに伝えています。

「富士山の森に入ると、シカの口が届くところの植物は見事に無くなっています。シカがいなくなつても困るのですが、多すぎても良くない。そのバランスを保つのも猟師の役割」と、今の仕事について動機を話してくれました。

シカの肉は鉄分、ミネラル分が豊富で低脂肪、高カロリーです。少しづつ、シカ肉の料理を食べさせる店も増えてきました。おいしくいただくことも生態系の保護につながるそうです。

脚注
環境省・人間環境フォーラム
環境省所管の公益法人。地球環境問題の科学的調査研究を目的に1990年に設立。
国立環境研究所・地球環境研究センターの研究サポート、研究成果の普及・啓発などのほか、月刊機関誌「グローバルネット」を発行。